

令和 3 年 6 月 21 日現在

機関番号：13601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K02357

研究課題名(和文) 古典技法を用いた芸術表現における触覚的教育に関する研究

研究課題名(英文) A study of tactile education in old techniques and artistic expression

研究代表者

猪瀬 昌延 (Inose, Masanobu)

信州大学・学術研究院教育学系・准教授

研究者番号：40597340

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は美術や造形に関わる触覚による教育の一端を明らかにするものである。我が国伝統的造形技法としての乾漆技法と張り子技法の共通点を歴史と実際の制作工程を理解し、その融合を目的とし、その過程において触覚的操作による形象化とその意味付けを考察した。粘土や漆(サビ漆)のような泥素材から、硬質で耐久性のある素材へと質を変化させて進められる制作過程においては、当然のことながら触覚的アプローチも変わる。そのアプローチの変化によって制作者の自己変容を教育的視点で捉える。

研究成果の学術的意義や社会的意義

美術造形と教育の関わりを実際の制作行為を基に教育的意義について考察した。そこでは制作された作品を「物語られた自己」と捉えた。この「物語られた自己」とは、制作活動そのものを対象とし、表現活動を時間軸と共に示すことで、活動(行為)、享受、解釈、変容のダイナミックな一連の流れを生み出し外界世界と自己との力強い繋がりを与えるものと考えられる。また、我が国の伝統的素材の教育的普及を目的とし、文化理解へと発展させることを目指した。

研究成果の概要(英文)：Research on tactile education related to art and modeling. This study looked for commonalities between dry lacquer and papier. And I aimed for the fusion of each. I also considered the figuration by tactile manipulation and its meaning.

Changing the quality from clay to a hard material also changes the tactile approach. Changes in approach give the creator self-transformation. Also, take those things from an educational point of view.

研究分野：美術教育(彫刻)

キーワード：触覚 彫刻 乾漆 教育

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 現在造形活動における触覚と教育の関係は、様々な角度から研究が進められている。また、造形活動そのものに焦点をおいた体験的知見に関する研究も盛んに行われている。本研究では、これまであまり行われてこなかった研究者自身が制作者としての造形活動における経験的知見を立ち位置とし、美術や造形に関わる触覚による教育的意義の一端を明らかにする。

(2) 我が国においては、明治以降より美術や工芸といった芸術文化の枠組みが再構築された歴史がある。その中で民芸や伝統工芸はその名の通り美術との区別がなされた。しかしながら目的や技法材料は多岐にわたるが、造形行為やその過程で起こる触覚的操作を丁寧に観察することは行われていない。

(3) 乾漆技法は天平時代に最盛期を迎え、その後木彫へと造形技法が移行したために衰退した技法である。現在において多く行われている脱活乾漆技法は、戦前から戦後にかけて、西洋に学んだ彫刻家山本豊市(1899-1987)によって現在の石膏雌型を利用した技法が考案され現在に至る。また、江戸期に最盛期を迎えた張り子技法は、城下町において豊富で身近になった紙類を用いた造形物で、乾漆技法を基に考案された技法である。現在において以上の2つの技法は、美術造形と民芸や伝統工芸と大別される技法であるが、可塑性や捻材を用いる造形技法としての共通した部分があり、その融合を目的とした研究は見当たらない。

(4) 粘土や漆(サビ漆)のような泥素材から、硬質で耐久性のある素材へと質を変化させて進められる制作過程においては、当然のことながら触覚的アプローチも変わる。そのアプローチの変化によって制作者の自己変容を教育的視点で捉えることは、制作過程で制作者自らの外界世界への働きかけの変化を捉え、素材の抵抗として外界世界から制作者への働きかけを捉え直す事である。このような一連の制作過程において、素材の変化に寄り添い自己の変容を伴う制作行為の理解をすることは、制作者による外界世界の理解であり、自己理解に繋がるものだと考えられる。

2. 研究の目的

(1) 研究の目的は、芸術表現と教育を繋ぐことにある。教科教育において「芸術による教育」が盛んに行われているが、本研究は芸術表現そのものを教育と捉えるものである。芸術表現は、その過程において人間形的意義を含有するものである。本研究では、芸術表現の中でも美術表現で用いられる粘土を代表とする可塑性に注目し、表現による触覚の教育を明らかにする。

(2) 本実践研究は、可塑性を用いた「触覚の型取りワークショップ」を行い、更には日本独自の技法と素材を援用した新技法の開発を通し、アイデンティティーの再確認を行うとともに、触覚の造形を芸術表現的観点で考察を行う。また、これらの表現活動と鑑賞を一對のものとして捉え、芸術表現の教育的価値と社会的意味を明らかにするものである。

3. 研究の方法

(1) はじめに我が国における可塑性を用いた造形として、陶土を用いた土偶や古典塑像、更には漆喰による鏝絵と江戸期に盛んに作られた張り子技法の歴史的背景を踏まえ、素材と技法の調査を行った。上記の調査により、天平塑像及び脱活乾漆技法と張り子技法に共通点を見出し、本研究の中心に据える事とした。

(2) 「触覚の型取りワークショップ」を複数回行い、造形された「かたち」と行為者(制作者)の意識調査から、ある一定の評価を得ることのできる「かたち」について考察した。そこでは、イギリス人彫刻家ヘンリー・ムーア(1898-1986)の言葉「充実したフォルム」をキーワードに、素材の物理的条件と行為者(制作者)の意思の形象化において、行為者を含む鑑賞者が形体をどのように享受するのかについて重点を置いて考察した。

(3) 乾漆技法に対して張り子技法は創成期が異なるものの、技法においては応用的措置として江戸期に盛んに行われた造形技法である。張り子技法は時代と共に身近になった紙材を転用して脱活乾漆の技法を模したものであることから、その特徴と効果について考察した。

4. 研究成果

(1) 天平期の脱活乾漆像と江戸期の張り子は、技法としての共通点が多く認められるものの、多くの差異が認められる。一つは、扱う素材がそれぞれの時代において一般的に流通していた

ものであるかという事である。江戸期の張り子で使用される紙とのりに対して、天平期乾漆における漆や麻布は貴重なものであってこと。量産を目的とした張り子に対して、脱活乾漆像は原型に対してオリジナルであること等が挙げられる。次に色彩の装飾的効果の重要性がある。量産を目的とした張り子は、どうしても方が甘くなり、色彩による効果を必要とするのに対して、脱活乾漆像も色彩が施されているが、その造形は極限まで緻密であり、色彩は乾漆の形体を引き出させる効果として認められる。

すなわち完成される造形の効果としては、形体（フォルム）の充実のための色彩か色彩を効果として狙った効率性の結果の形体（フォルム）に大別することができる。

(2) これまでも人々の生活と共に優れた形態（フォルム）が多く生み出されてきたが、美術領域において優れた形体とはいかなるものであるのか。そこには鑑賞者のみならず、制作者自身が「つくられたかたち」から感じ取る充実感が必要になってくる。そこでイギリスの彫刻家ヘンリー・ムーアの言う「充実したフォルム」という言葉をキーワードにワークショップで作られた作品を制作者自らが鑑賞し、形体への理解を深めた。このワークショップで「つくられたかたち」は全部位において隙間なく緊張関係が凝固され、全ての部位に形象化された意味が存在する。言い換えると制作者の意思としての制作行為が、外界世界としての素材と緊張関係を保ったものである。この部位の説明としか言葉では表し切ることのできないフォルムの密度を享受してこそ「充実したフォルム」の体感として得る事が可能である。

(3) 美術造形と教育の関わりを実際の制作行為を基に教育的意義について考察するには、制作された作品を「物語られた自己」と捉える事が必要である。この「物語られた自己」とは、制作活動そのものを対象とし、表現活動を時間軸と共に示すことで、活動（行為）享受、解釈、変容のダイナミックな一連の流れを生み出し、外界世界と自己との力強い繋がりを与えるものと考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------